

# 21世紀型能力を育む授業デザイン

## ～教師の共感的かかわりを大切にして～

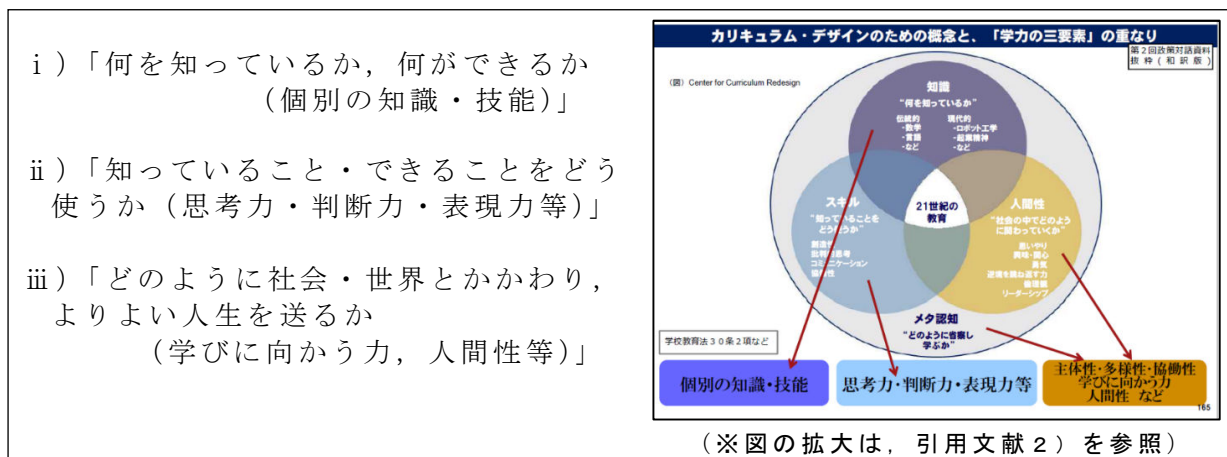
### 1 研究の目的

**主張①：これからの社会を生きるには、知識・情報・技術を生み出さなくてはならない。**

これからの社会は、平成17年の中央教育審議会答申1)（前回学習指導要領改訂での答申）において『新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す』社会と定義される、いわゆる『知識基盤社会』である。

加えて、平成27年8月に文部科学省より出された教育課程特別部会論点整理2)（以下、論点整理）において、この『知識基盤社会』という21世紀の社会像を認識しつつ『さらにこれからは、グローバル化や情報化をはじめとした社会の加速度的な変化にどのように向き合い、関わっていくかが問われなければならない』ことが示されている。

このような社会の変化を念頭に、論点整理では、これから育成すべき資質・能力として三つの柱 i)～iii) が提起された。この柱は国立教育政策研究所が提起している『21世紀型能力』を踏まえつつ、次期学習指導要領の改訂に向けて出されたものである。



注目したいのは、一つ一つの柱が切り離されないうちに『21世紀の教育』がある点である。例えば、『人間性』の柱を取り除くと、『知識』『スキル』の柱と重なり合うことで示されている『21世紀の教育』が成り立たなくなる。これまでの『21世紀型能力』でも階層的に『実践力』『思考力』『基礎力』の相互の関連を示していた3)が、相関的に示されることで、より意識的に三つの柱がつながり合い、相互に影響し合うことの重要性が強調されているのである。

つまり、社会の変化において、知識・技能は獲得することのみを目標とするのではなく、学びに向かう中での必然性のある『知識・技能』として獲得することを意味する。『スキル』（思考力・判断力・表現力等）においても、「思考力・判断力・表現力だけを切り離された、どう使うのがよいのか」という形式（パターン）を得ることがめざされるのではない。これからの社会で大切なのは、「学びに向かう中での、どう使うのか」であり、今後、一人一人が直面する問いに即して、「どう使えるのか」を、自分で考えることが重要なのである。

主張②：21世紀の教育において学びに向かう情意面が切り離せない。

石井は、学校で育てる能力を『知っている・できるレベル』『わかるレベル』『使えるレベル』として階層性で提唱<sup>4)</sup>し、その中で「知を創造する」ことを『使えるレベル』として示している。本研究では、目的意識と思考力の関連として整理し、その階層を以下のように解釈した。

- 『知っている・できるレベル』  
→知識の獲得と定着に即した思考であり、子どもは正答主義的に「記憶と再生に向けた目的意識をもって」「答えに向かおうとする思考」をする。
- 『わかるレベル』  
→知識の意味理解と洗練に即した思考であり、子どもはその「概念や方略の獲得・解釈に向けた目的意識をもって」「より深く理解しようとする思考」をする。
- 『使えるレベル』  
→知識の有意義な使用と創造に即した思考であり、子どもは「新しい自分の創造に向けた目的意識をもって」「知識を総合的に活用し新たな知を生み出そうとする思考」をする。

「答えに向かおうとする思考」や、「より深く理解しようとする思考」そのものを否定するわけではないが、階層が示すように、いくら一つ一つをわかろうとも、届かないレベルの能力がある。つまり、『わかるレベル』での思考を最終的な目標にしているのは、『使えるレベル』での思考は育めない。

本研究では、情意についても同様にいえると考えた。いくら一つ一つの「概念や方略の獲得・解釈に向かう」（わかるレベルの）ことをしても、「新しい自分の創造に向かう」（使えるレベル）というレベルの目的意識はもてない。

『わかるレベル』や『知っている・できるレベル』の能力は、『使えるレベル』をめざす中で、その一つ一つの学ぶ意味を子どもが意識し、育まれるべきであろう。

以上より、21世紀の教育において学びに向かう情意面が切り離せないことを重視して、知の創造といえる「使えるレベル」での能力を育成することを本研究の目的とする。

そして、本研究の内容としては子どもが「知識を総合的に活用し新たな知を生み出そうとする思考」ができるように、「新しい自分の創造に向けた目的意識をもつこと」ができるような授業、授業観とは何かを問うこととする。

## 2 研究の内容

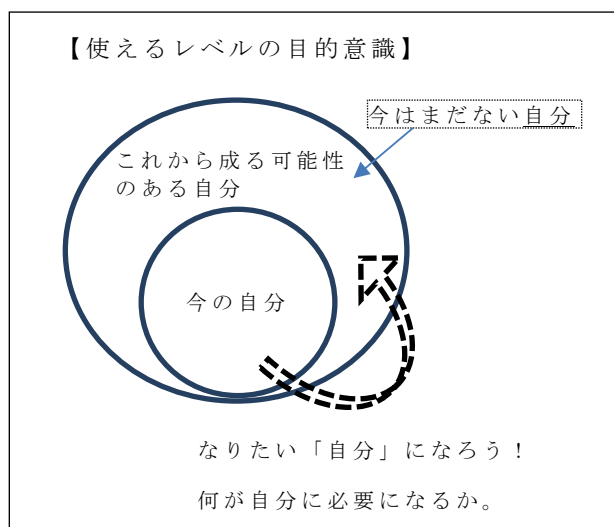
**主張③：今の自分を自覚することが、新しい自分の創造に向けた目的意識につながる。**

新しい自分を創造しようとする目的意識とは、右の図のように、今の自分を自覚し、今はまだない自分への成りたい動機<sup>5)</sup>をもつことが必要であると考えます。

詳述すれば、ある事象や対象と対峙したときに「自分はここまでわかっている」「自分はこんな見方・考え方をしている」と、「今の自分」が自覚できる。

それは同時に、「今はまだない自分」が認識できているともいえ、これから成る可能性のある自分として存在することになる。

それが、成りたい「自分」、知りたい「自分」、やれそうな「自分」といったものであるならば、自分自身がそこへ向かいたい動機が原動力として働き、新しい自分を創造しようとする目的意識をもつ。

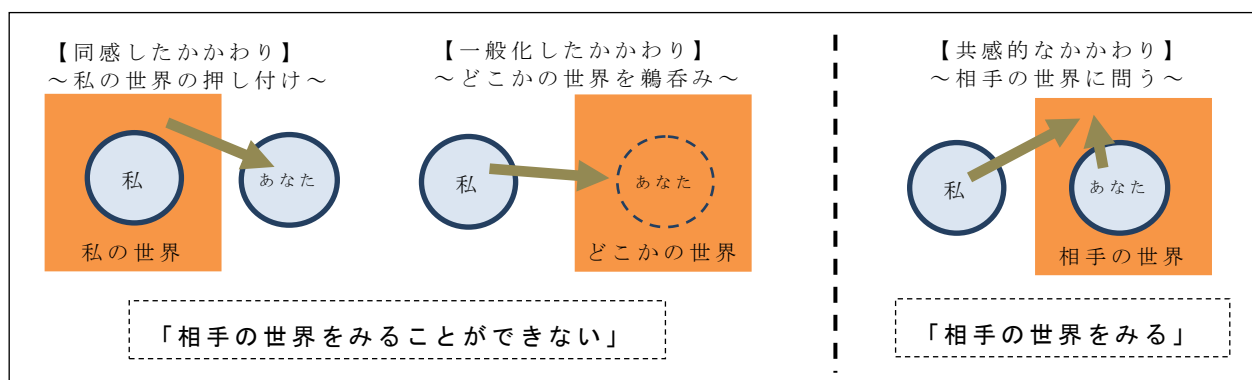


**主張④：共感的なかかわりこそが、今の自分を自覚させる。**

このような「今の自分を自覚」することは、他者（ヒト・モノ・コト）とのかかわりにおいて生じる。他の人の意見を聞く、資料をみる、作品をみる、物語を読む、空気に触れるなど、他者には、その他者一つ一つに相手の世界（相手が生きてきた歴史性や文化性といった背景、文脈の上での意味や意図、意義）があり、自分の世界と全く同じとはならない。他者にかかわり、相手の世界をみることによる自分とのズレの認識が、「今の自分」「今はまだない自分」を認識させてくれるのである。

しかし、どのようなかかわり方でも相手の世界がみえるのではない。

本研究では相手の世界をみるかかわり方として、「共感的にかかわる」というかかわり方が重要であると考えた。（下図参照）



「共感」について佐伯<sup>6)</sup>は『そこにいたる経緯やそこでの状況をしっかり把握して、その場にわが身をおいて、なんとかして、そこでの「良さ」を心底「納得」しようとする』ことであると述べている。

共感的にかかわることは、相手を相手としてみて、「あなたが知ってほしいことは何か」と相手の世界に問いかけ、その相手の世界の背後にある意図や意味、意義などにも目を向けようとするかかわり方である。

一方、「同感」は『その人の感じていることと自分の感じていることを同じなのだと思うこと』であり、そこでは、「そうに違いない」という私の世界で相手をみてしまうことになる。また、「それはそういうものだ」として、「一般化された」別の世界を相手に置き換えてみてしまうかかわり方がある。そこでも私が用意した別の世界で相手をみてしまうことになる。

このような同感や一般化したかかわりでは、相手の世界をみようとせず、私の中では何も新しいものはないので、自分にはないものの自覚は生じない。つまり、新しい自分の創造には向かわない。

共感的にかかわりこそが、新しい自分の創造に向けた目的意識をもたせる、『使えるレベル』での情意の中核に位置し、21世紀の教育に今、必要といえる。

子どもが共感的にかかわっている姿とはどのような姿か、本研究で考察した例を、下記に4点示す。

- ・今の自分が自覚され、わからないことに対する問いが常に子ども自身から生成されることになり、主体的な問題解決となる。
- ・思考する向きは、見る必要性のある他者へと、タイミングに応じて様々な方向になり、そのものへの問いかけ（注視する、状況や背景をみる）を時間をかけて行い、多様な見方ができるようになる。
- ・発表者に対する注目の仕方が変わり、意味や意図に向けた問いが生まれたり、新しいものをお互いが協力して創ろうとしたりする。
- ・板書が問題解決型や形式にあてはめたものではなく、相手に伝えるための、または理解に必要なものをデザインする場となる。

これらの共感的なかかわり方は、他者からの学び方や他者への学ぶ態度を変え、学び合う文化が教室の中に創られる。それは、目に映る他者が価値のあるものとして輝き、他者のおかげで学ぶことを自覚できる学習環境である。社会に出てからも、『使えるレベル』での学びを拓くことができるのは、そういった子どもの根底にある共感性を育てていくことに他ならないと考えた。

### 主張⑤：教師の共感的かかわりがあるこそ、子どもは共感できる。

このような子どもが共感的にかかわる授業を考える上で、まずは私たち教師自身が共感的にかかわってきたかを振り返ることが重要といえる。

これまでの授業や教師のあり方として、『正答主義の学習観』<sup>7)</sup>がある。「子どもはこうあるべきだ」「私だったらそうする」として子どもをみる正答主義の学習観においては、教師は子どものことを、共感的にみてはいない。先述の発表後の拍手を教師が誘うのは、「そういう時に拍手する子どもたちが良い」とされてきたからであろう。「五年生にもなって」という言葉にある「五年生」とは、「子どもたち」の「たち」とは、一体誰の姿か。

子どもの「それはこうに決まっている」「みんなそうしているではないか（なんでぼくだけ）」「ぼくも同じ、よかったよかった」という表現を共感的にみる（子どもの世界からみる）ならば、我々大人がそういう共感的ではない面をみせている表れとはいえないだろうか。

共感的でない自分を教師自身が自覚できたならば、教師も新しい自分の創造（子どもを中心とした授業のデザイン）に向かえる。子ども自身に共感的な姿をみせること自体も、子どものかかわり方に影響を与える。

上に示した子どもが共感的であるときの授業例と、実際の実践を照らして省察し、この学習観や授業観の大きな転換にたつて、子どもたちのために共感的にかかわっていくことをめざす必要があると考えた。

### 3 本研究の方法

本研究では、『使えるレベル』での能力の育成をめざす上で、共感することの必要性に着目し、まずは教師が共感的に子どもや教材にかかわるようにする。それは、実際の授業における子どもの表現や教材を「形式」ではなく、相手の思いを共にしようとして意味や意図を読み取ろうとするのである。共感的に教師がかかわることは教師の授業に対する目的意識も、子どもに形式を授けることから、子どもが新しいデザインや見方を生み出すことに変わるだろう。

さらには、教師が共感することを意識的に行うことで、子どもの見え方がかわり、子どもを中心とした学び合う文化を教室に根付かせることが可能になると考える。

その上で、子ども同士、子どもと教材や自然事象、社会事象とが共感的にかかわることで、新しい自分の創造に向けての知の創造が可能になり、これまでの学習以上に深い理解を促し、21世紀に必要な『使えるレベル』としての能力の育成への視点がみえてくるのではないかと考えた。

上記のことから、

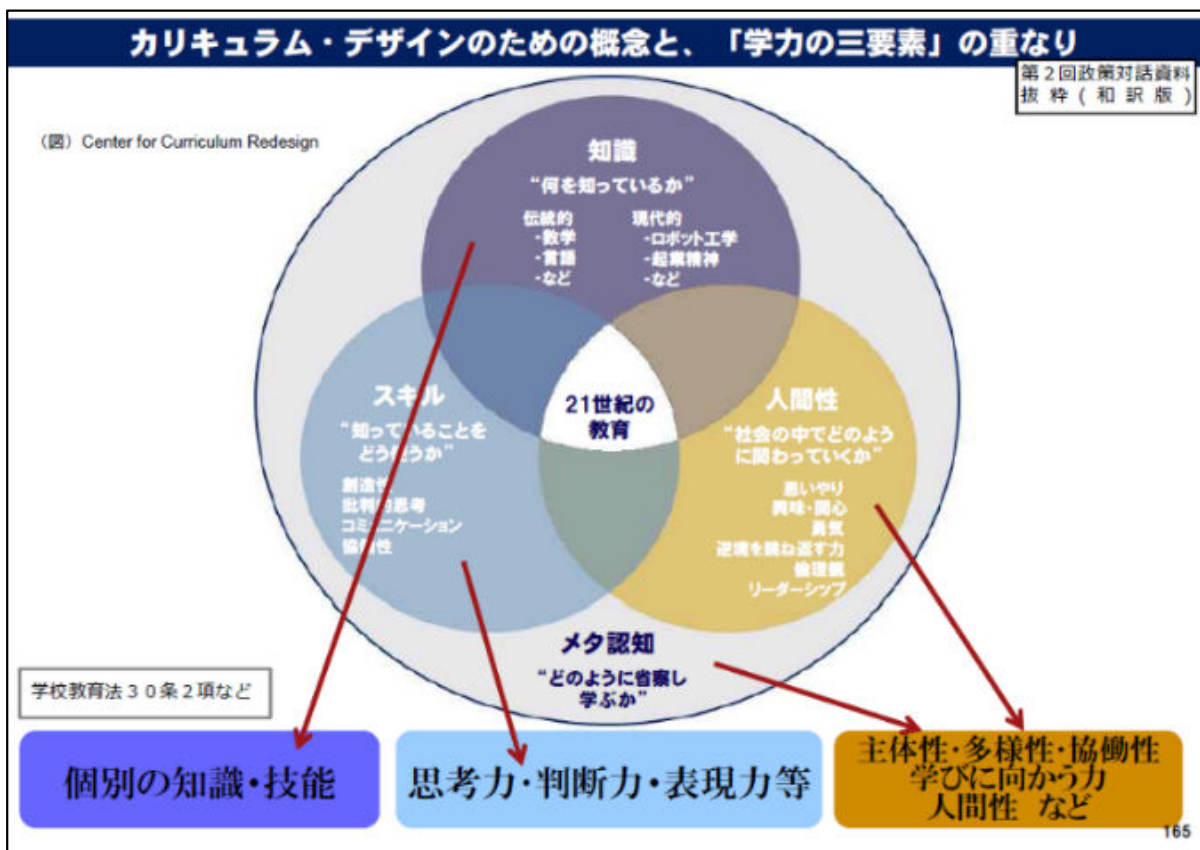
『教師が共感的に子どもや教材とかかわることで、子どもを中心とした学びが可能になる』

『子どもが他者に共感的にかかわることで、使えるレベルとしての思考が可能になり、わかるレベル、知っている・できるレベルの思考も深まる』

という研究仮説のもと、共感性を意識し、今までの教育観を見つめ直し、各教科の特性や子どもの実態に寄り添って、それらの授業デザインの変容を各教科で提案していく。

【引用文献】

- 1) 中央教育審議会（2005）『我が国の高等教育の将来像（答申） 第1章 新時代の高等教育と社会』（高等教育局高等教育企画課高等教育政策室）
- 2) 文部科学省（2015）『教育課程特別部会論点整理』 p. 6



3) 「21世紀型能力」 国立教育政策研究所が提起した、今後の教育課程編成で育成が求められる資質・能力の枠組み（下記囲み参照）

「未来を創る（実践力）」

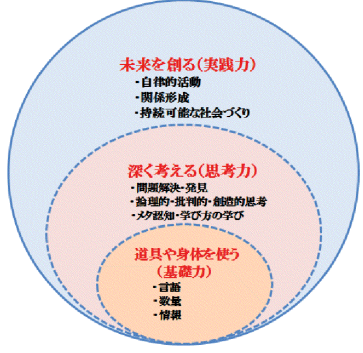
生活や社会，環境の中に問題を見だし，多様な他者と関係を築きながら答えを導き，自分の人生と社会を切り開いて，健やかに豊かな未来を創る力

「深く考える（思考力）」

一人一人が自分の考えを持って他者と対話し，考えを比較吟味して統合し，よりよい答えや知識を創り出す力，さらに次の問いを見つけ，学び続ける力

「道具や身体を使う（基礎力）」

言語や数量，情報などの記号や自らの身体を用いて，世界を理解し，表現する力



4) 石井英真（2015）『今求められる学力と学びとは』 日本標準 p. 23

5) 文部科学省（2015）『教育課程特別部会論点整理 補足資料』 pp. 192-194

6) 佐伯胖編（2007）『共感』 ミネルヴァ書房 p. 24

7) 石井英真（2015）『今求められる学力と学びとは』 日本標準 p. 44

#### 【参考文献】

- ・ 秋田喜代美（2000）『子どもをはぐくむ授業づくり』 岩波書店
- ・ 佐伯胖（1995）『「学ぶ」ということの意味』 岩波書店
- ・ 廣中直行 遠藤智樹（2011）『ヤミツキの力』 光文社
- ・ 西岡常一 小川三夫 塩野米松（2005）『木のいのち 木のこころ』 新潮社
- ・ ロイス・ホルツマン（2014）『遊ぶヴィゴツキー』 新曜社
- ・ 佐藤学著（1996）『教育方法学』 岩波書店
- ・ 三宅なほみ監訳（2014）『21世紀型スキル』 北大路書房
- ・ 秋田喜代美編（2010）『教師の言葉とコミュニケーション』 教育開発研究所
- ・ 佐伯胖（2013）『子どもを「人間としてみる」ということ』 ミネルヴァ書房
- ・ 森本信也（2013）『考える力が身につく対話的な理科授業』 東洋館出版社
- ・ マイケル・トマセロ（2013）『コミュニケーションの起源をさぐる』 勁草書房
- ・ 佐藤学（2010）『教育の方法』 左右社
- ・ 秋田喜代美（2012）『学びの心理学』 左右社
- ・ 茂呂雄二 ほか編（2012）『状況と活動の心理学』 新曜社
- ・ 田村学（2013）『考えるってこういうことか！「思考ツール」の授業』 小学館
- ・ R. リチャート M. チャーチ K. モリソン著 黒上晴夫 小島亜華里訳（2015）『子どもの思考が見える21のルーチン』 北大路書房
- ・ ダン・ロスステイン ルース・サンタナ著 吉田新一郎訳（2015）『たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」』 新評論